様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２１０５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３２４８

研究課題名（和文）中級日本語学習者の文章における「内容面」の評価統一に向けた評価研究と評価活動

研究課題名（英文）Action Research on the Unification of the Japanese Essay Writing Assessment for Intermediate Japanese Level Foreign University Students

研究代表者
安達　万里江（Adachi, Marie）

筑波学院大学・経営情報学部・助教

研究者番号：１０８２３８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語中級レベルの学習者の文章をデータとし、「内容面」を対象に評価研究を行った。そして、どの教育現場にも起こり得る「評価の不一致」という問題解決に貢献することを目的とした。本研究で得られた成果は2点である。1点目は、文献調査によって「オリジナリティ（独自性）の評価が困難」という結果である。しかし、調査結果より、オリジナリティの評価は「全く一致しない／一致させることは不可能とは言えない」ということが分かった。2点目は、本研究成果より「L2日本語ライティングの評価研究―オリジナリティの理論構築と評価者トレーニング―」（基盤研究C：23K00643）として研究課題の深化に至ったことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果は今後、次の2点ような学術的意義や社会的意義につながっていくと考える。
（１）従来のL2日本語ライティングの評価研究では、言語面や構成面に焦点化されたものが多く見られるが、内容面の評価研究は少ない。機械による評価、人間による評価のいずれもオリジナリティの評価は困難という課題が残っている。その解決への糸口となるような理論・実践研究へと向かう。（２）L2日本語ライティング教育関係者間において、未だに評価の一致に導くための共通した理論や技能はなく、個々の自己研鑽に委ねられているという現状である。そのため、ライティング教育や評価に関心を持つ人々のアカデミック・コミュニティ形成の一助となり得る。

研究成果の概要（英文）：This study was an assessment study of the writing content of intermediate Japanese language learners, using actual writing samples as data. The purpose of this study was to contribute to solving the problem of “discrepancies in assessment” that can occur in any educational setting. As a result, two important findings were obtained. First, the literature review revealed that “ assessing originality ” is a difficult task. However, the study results suggest that the evaluation of originality is not necessarily “completely contradictory or unfeasible. Second, the results of this research have led to the launch of a new research project entitled (Grant-in-Aid for Scientific Research (C)23K00643) to further deepen the research theme.

研究分野：日本語教育

キーワード：L2日本語　ライティング評価　オリジナリティ　独自性　ルーブリック　中堅研修　評価研究　作文評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語教育に留まらず、大きな研究動向として次の２点が挙げられる。

１）国内外の外国語教育における自由記述文の自動採点・評価の研究が進んでいる。

２）各教育現場におけるルーブリック評価による実践報告が広がりを見せている。

上記１）に関しては、例として「自由記述文の自動採点システム」の実施・研究が進められているが、自動採点では測るのが難しいとされている「内容面」を本研究で取り上げることによって、別の側面から評価研究が深められると考えた。

上記２）に関しては、近年、ルーブリックが「パフォーマンス課題において非常に便利な評価ツールである」という認識が広まり、様々な教育機関で作成・公開が試みられている。しかし、学術的に研究・検証されている事例は少ない。本研究領域である日本語教育においても同様であった。そこで、中級レベルの日本語学習者によって書かれた作文をデータとし、「内容面」を対象に評価研究を行うことにした。文章の内容面の「評価の統一（評価不一致の改善）」という問題解決に向けた「評価活動の実践」を、本研究によって行うことで、日本語教育学の枠に留まらず、その成果を他の分野・領域に還元できると考えた。

２．研究の目的

日本語中級レベルの学習者によって書かれた文章をデータとし、「内容面（一貫性・独自性）」を対象に評価研究を行う。そして、文章の内容面を評価する際、どの人・言語・教育現場起こり得る「評価の不一致（ばらつき）」という問題解決に貢献することを研究目的とする。

３．研究の方法

（１）文献レビュー（安達 2019a, 2019b）

日本の大学の学部留学生を主に対象としたライティングの評価研究より、評価の統一に向けた課題を探ることを目的としている。その背景には、クラス分け等で行う診断的評価と、教員が行う主観的な評価が一致しなかったことにある。そこで、どのような評価観点において不一致が見られるのかを 19 本の文献レビューによって探り、考察を行った。

その結果、「どのような評価観点において不一致が見られるのか」という問題提起に対し、「評価の一致」は困難だが「評価の統一」のためのヒントがいくつか確認でき、本稿では 3 点を取り上げている。

1. 評価基準シートやフローチャートシートの作成（田中・阿部；2014）
2. トレイトごとの細かな分析（田中他；2017、伊集院他；2018）
3. ルーブリックによって評価を可視化し、学習者側にも研究成果を還元することで授業の改善点を把握する。（脇田：2016）

そして、引き続き評価研究を進めていくにあたり、これまでの研究とは異なる、新たなを観点 4 つ示す。

1. 「日本の大学」「留学生」「中級」にしぼる。
2. 中級の作文＝「意見文」とし、テーマをしぼる。
3. 評価のずれを「内容面」にしぼって分析する。
4. これまで以上に学習者も評価活動に参加する。

（２）調査研究（安達 2020a, 2020b, 2020c）

- 使用した作文データ：多言語母語の日本語学習者横断コーパス I-JAS より、国内・教室環境（テーマ「ファーストフードと家庭料理」）のエッセイ
- 評価者：５年以上、日本の大学で作文教育の経験のある日本語教員
- 調査方法：
  - 評定値（ルーブリックによる評価）
  - 評価理由（自由記述）
- 分析方法：
  - 統計分析：標準偏差 *SD* とフライスの κ 係数から算出された p 値（SPSS・R）
  - 計量テキスト分析：(KH Coder)

４．研究成果

1. 文章の内容面の評価研究において、これまで確立した方法があるとは言えなかったため、調査方法および分析方法をデザインする必要性があった。本研究で再現性のある手順を模索できた。
2. 本研究における内容面の評価観点を「一貫性」と「独自性」と定めた結果、「独自性」の評価はずれ、評価に使用したルーブリックの評価基準（能力記述文）を改定する

必要がある。

3. 統計的には数値（標準偏差 SD とフライスのκ係数から算出された p 値）の結果より、内容(独自性)は「全く一致しない」「一致させることは不可能」とは言えない。
4. この結果について、口頭発表を経て、本研究に関心の高い研究協力者等と議論した結果、他の評価観点と比較すると「オリジナリティ」に対する解釈の違いが最も大きいのではないかという結論に至った。
5. 中級のライティングは、「オリジナリティのある文章の指導／評価をしなくてもいい」とイコールであるとは言えないと考える。意見文の指導を始める日本語中級レベルの段階で、オリジナリティのある文章を書くための指導ができ、評価できるようになるためのトレーニングが必要であると考える。

【引用文献】

1. 安達万里江（2019a)「日本語ライティングの評価研究―文献レビューより「評価の統一」に向けた課題を探る―」『日本語教育連絡会議論文集』、31 号、pp.128-137.
2. 安達万里江(2019b)「次世代の日本語教員のための教育評価―日本の教育評価研究における理論的考察―」『CAJLE2019Proceedings』カナダ日本語教育振興会（CAJLE)、pp.7-16.
3. 安達万里江（2020a)「日本語教員による作文の内容に関する評価要因」日本語プロフィシェンシー研究学会（京都外国語大学）
4. 安達万里江（2020b)「日本語教員の評価のずれ：内容面の評価に関する予備的研究」全米日本語教育学会（AATJ）AATJ2020 Spring Conference（https://www.aatj.org/aatj-2020-spring-conference-materials-sharing/）
5. 安達万里江（2020c)「L2 日本語作文の内容に関する評価研究 ―ルーブリック改訂前後の評定・評価理由の比較―」第 5 回学習者コーパス国際シンポジム　LCSAW 5
6. 伊集院郁子・小森和子・奥切恵（2018)「大学教員によるライティング評価の観点を探る」Ishikawa, S.（Ed.). 133-Learner Corpus Studies in Asia and the World Vol.3. Papers from LCSAW2017. Kobe, Japan: Kobe University.pp.159-176.
7. 田中真理・阿部新（2014)『Good Writing へのパスポート―読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版
8. 田中真理、阿部新、影山陽子、佐々木藍子、坪根由香里(2017) 「ヨーロッパ日本語学習者のライティング（エッセイ）分析：総合的評価とマルチプルトレイト評価結果を参照して」『ヨーロッパ日本語教育論集』22,pp.75-95.
9. 脇田里子（2016)「ライティング・ルーブリックの実践」『コミュカーレ』第５号, pp.21-50.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 安達万里江	４．巻 9
２．論文標題 中級日本語学習者のレポート評価に関する実践報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 関西学院大学高等教育研究	６．最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安達万里江	４．巻 31
２．論文標題 日本語ライティングの評価研究―文献レビューより「評価の統一」に向けた課題を探る―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	６．最初と最後の頁 128-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安達万里江	４．巻 7
２．論文標題 次世代の日本語教員のための教育評価―日本の教育評価研究における理論的考察―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 CAJLE2019Proceedings	６．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安達万里江・亀田千里	４．巻 19
２．論文標題 筑波学院大学の日本語教育－過去・現在の考察と日本国際学園大学の日本語教育への提案－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 筑波学院大学紀要	６．最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 安達万里江
２．発表標題 L2日本語作文の内容に関する評価研究 ―ルーブリック改訂前後の評定・評価理由の比較―
３．学会等名 第5回学習者コーパス国際シンポジム　LCSAW 5 (2020)
４．発表年 2020年

１．発表者名 安達万里江
２．発表標題 次世代の日本語教員のための教育評価―日本の教育評価研究における理論的考察―
３．学会等名 カナダ日本語教育振興会(CAJLE)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安達万里江
２．発表標題 日本語教員による作文の内容に関する評価要因
３．学会等名 日本語プロフィシェンシー研究学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 安達万里江
２．発表標題 日本語教員の評価のずれ：内容面の評価に関する予備的研究
３．学会等名 全米日本語教育学会（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計5件

1．著者名 上田暢美・内田嘉美・桑島卓男・糠野永未子・吉田歌織・若林佐恵里・安達万里江	4．発行年 2022年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 96
3．書名 『とりあえず日本語能力試験対策 N2 文字・語彙』	

1．著者名 上田暢美・内田嘉美・桑島卓男・糠野永未子・吉田歌織・若林佐恵里・安達万里江	4．発行年 2022年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 88
3．書名 『とりあえず日本語能力試験対策 N2 文法』	

1．著者名 上田暢美・内田嘉美・桑島卓男・糠野永未子・吉田歌織・若林佐恵里・安達万里江	4．発行年 2021年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 128
3．書名 『とりあえず日本語能力試験対策 N1 読解』	

1．著者名 上田暢美・内田嘉美・桑島卓男・糠野永未子・吉田歌織・若林佐恵里・安達万里江	4．発行年 2021年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 88
3．書名 『とりあえず日本語能力試験対策 N1 文法』	

１．著者名 上田暢美・内田嘉美・桑島卓男・糠野永未子・吉田歌織・若林佐恵里・安達万里江	４．発行年 2021年
２．出版社 ココ出版	５．総ページ数 88
３．書名 『とりあえず日本語能力試験対策 N1 文字・語彙』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本語ライティングの評価に関する研究
https://kakuhyoka.com/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関